

## 【研究課題紹介】

## 「久保寺逸彦文庫」の写真資料

## はじめに

アイヌ文学、民族学の研究者として知られる久保寺逸彦くぼでらいつひこ氏の研究資料（「久保寺逸彦文庫」）は、平成9（1997）年に当センターに寄贈され、その整理状況や、内容などは、すでにこのたよりや目録などで報告しているとおりである。

久保寺氏はアイヌ文学の研究でその名を知られているが、氏の残された資料の中には、研究の中心であった文学関係の調査ノート、筆録した物語などの他にも、多くの写真やフィルムなどの映像や音声資料といった資料が含まれている。

久保寺氏は昭和9（1934）年から、調査時に筆録以外の記録として写真撮影や16ミリフィルムを用いた。特に写真は、その生涯にわたり撮影を続けているが、自らの著作などではその撮影写真をあまり用いておらず、多くは世に知られていないものである。

また、昭和9、10年の調査では、写真と同時に各地で歌や物語の録音なども行った。

こうした氏の残したレコード、写真などの音声や映像記録は、日本人の研究者が残した資料としては最も古い時期の資料でもある。

久保寺氏のこういったアイヌ文化を後世に残そうとする姿勢を、昭和10年の調査に同行した金城朝永きんじょうちゆうえい氏は久保寺氏の言葉として次のように書き残している。

「こう云う貴重な謡は今の中に記録でもして置かないとモッタイ無いと考えて、よくは解らないがこんなことでもして残したい」

久保寺氏は「よく解らないが」としているが、結果として撮影したフィルムや、録音したレコードは、現在では他に比較できる資料がないほど貴重なアイヌ文化の記録となっている。

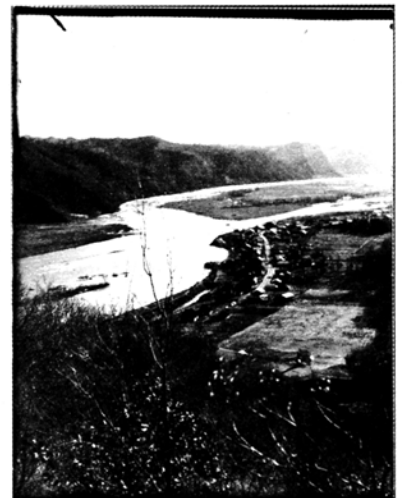
## 資料概要

久保寺氏が、昭和9年から昭和40年代の調査で撮影した写真は約1,800コマである。その撮影時期は3期に分類することができる。

第1期は、昭和9～11年にかけて、北海道、樺太を調査した際に撮影したものである。主な撮影地は、昭和9年の千歳、白老、平取など、翌10年の虻田、伊達、浜益、旭川、樺太各地、網走、美幌である。チセ（家）や、コタン（集落）の風景、儀式の他に、カメラが珍しかった時代を反映した盛装した人たちの記念撮影、趣味としての撮影（近所の公園、学校の行事、同僚、教え子）などが多いのもこの時期の撮影の特徴でもある。この時期は主にガラス乾板を使用し、劣化フィルムはデュープしてあった。その他ブローニーフィルムも僅かであるが用いている。

第2期は昭和20年代末の撮影である。論文の図版として使用する各地の墓標や祭壇（ヌサ）の撮影が多い他、現在でも写真資料などの少ない釧路や標茶、白糠などの道東で撮影した写真が多いのが特徴である。昭和29年の撮影には、久保寺氏の監修映画「アイヌの川漁」の作製の際に千歳、鶴川で撮影した写真が多数含まれている。この時期はすべてブローニーフィルムを用いている。

第3期は昭和30年代末から40年代初頭の調査の際の撮影である。かつての調査地や、調査対象者、民具などを多数撮影して



昭和9年に撮影した平取本町

義経神社の裏手の台地から見た平取本町。沙流川が大きく、本町には人家も少ない。写真中央にはオキクルミの像が小さく写る。

いる。普及した35ミリフィルム、しかもハーフサイズのカメラを用いての撮影もあり、コマ数は多い。

これらの写真は、研究者がアイヌ文化の記録を意図して撮影したものであり、資料の多くは撮影年代、撮影地が判明している。撮影地は地域的な広がりがあり、内容の分析によってアイヌ文化の時代差、地域差などの比較研究に用いる一級の資料と判断し、当センターの研究課題「久保寺逸彦文庫」中の写真資料に見るアイヌ社会の返遷に関する調査研究」として取り上げている。

### 写真資料の調査について

これまでに久保寺氏の調査ノートなどから、調査の足跡などをたどり、写真撮影の時期や場所の不明なものや人物について調査を行った。

撮影地は現在とは風景が異なってしまった場所も多く、地元での聴き取りや、撮影現場の確認も行った。その結果、風景写真は、ごく一部を除き撮影地の特定はほぼ終了した。また、戦前の撮影には、盛装をした人の記念撮影が多くある。その人たちについての記録はほとんど残されていない。そのため、久保寺氏の調査をたどり各地で聴き取りを行い、氏名の確認を行った。その中には、今まで写真では知られていない著名な伝承者も含まれている。

調査は継続して平成16年も行うが、調査によってさらに判明することも多いと考えている。

こうした調査により内容の判明した写真から、順次公開の手続きを進めている（平成16年3月末現在約500点）。

### その他の写真資料

久保寺氏は、自ら撮影した写真と併せて、白老の木下写真館他から入手した写真や絵葉書などをカードに添付し整理しており、今後はその資料のオリジナル資料の調査も考えている。

（研究課長 古原敏弘）

### 【こんなときは】

#### 人物の足跡や関係する資料について知りたい

研究センターによく寄せられる問い合わせの一つに、ある人物について、その略歴や関係する文献を知りたいというものがあります。最近では、アイヌ文化に関する学習・伝承活動の中で、ある伝承者に関する記録がどのような文献に載っているかを探す、といった問い合わせも見られます。

\* \* \*

その人の簡単なプロフィールを知るには人名辞典等を、より詳しく関係する文献や資料などを調べるための手がかりとしては、人物文献目録等を用います。現在では『人物レファレンス事典』（日外アソシエーツ）のような文献が数種類あり、こうした調査のための情報源は比較的整備されています。とはいえ、これらの文献から得られるアイヌ関係の情報量はそう多いものではありません。例えば『日本人物文献目録』（平凡社、初版1979年）は、約3万名を掲載する、刊行当時としては画期的な大著ですが、アイヌの文化や歴史の関係者としては僅かに知里真志保、違星北斗、金田一京助らを見つけることができるのみです。近年の辞典類では掲載される人数も増えてはいますが、それでも比較的知られている人が中心になる点は否めません。文学史や思想史等の分野では、主要な人物について、年譜、著作目録、関係文献の情報などを網羅した人物書誌と呼ばれるものが多く出版されていますが、アイヌの人々に関するものはまだほとんど見られません。

北海道に関するものでは、古くは大正時代に執筆された河野常吉編著『北海道史人名字彙』（北海道出版企画センター、1979年）は、約1,100名を掲載し、アイヌについても江戸時代以前の記録に載っている人物や押柁帯九郎のようにその後余り知られることの少なかった人まで、かなりの人数を掲載しています。比較的近年では、『北海道大百科事典』（北海道新聞社、1981年）の内容をもとにした『北海道歴史人物事典』（同、1993年）なども出版されているほか、

『根室・千島歴史人名事典』(同刊行会、2002年)など、より地域に焦点を合わせた出版も見られるようになりました。

アイヌ自身による著作が登場するのは20世紀に入ってからのことですが、その中でも先駆者や同時代の人物の消息などがしばしば取り上げられています。中でも旭川の荒井源次郎は、地元あらいげんじろうの雑誌に「アイヌ人物伝」を連載し、没後遺稿がまとめられ『荒井源次郎遺稿 アイヌ人物伝』(北海道出版企画センター、1992年)として出版されました。ここでは78名が取り上げられています。

人物に関して調べる手がかりとなる文献には様々なものがありますが、中には、他の事典類からの孫引きの記述も見られるので注意が必要です。出典を明記し参考文献を挙げているもののほうが、より深く調べたりする際にも役立ちます。また、特に古い文献には誤った情報や偏見に基づく記述もまま見られること、人物の履歴の追跡がプライバシーの侵害につながらないようにする等の留意も必要です。

\* \* \*

こうした中で、アイヌ文化に関して特筆すべき文献は、やはり『文献上のエカシとフチ』(札幌テレビ放送、1983年)だと思えます。



この本は、『エカシとフチ』という、アイヌの古老からの聞き書きをまとめた本の「資料編」として編さんされたものです。掲載した人数は519名に上り、それぞれの人物について、生没年、出身地、生活体験地のほか、その人に関する記録が載っている文献名などが記されています。掲載した人数の多さ、調査した範囲の広さ、出

典を明記している点など、刊行から20年以上を経た今でも他に類するものがない大きな業績だと思えます。

多くの人名辞典は、通常、先ず著名な人物を選び出しその人に関して記述していく、という手順で編さんされます。これに対し、この本は、明治以降に刊行されたアイヌの文化や歴史に関する文献等の中から伝承者らの名前が比較的多く記録されているものを選び、そのうち420点から1,418名の人名を抜き出し、その中でまとまったデータを得ることのできた人たちを本文に掲載する、という作業によっています。調査の範囲が網羅的であり、かつ明示されていることによつて、今後の作業の基盤になりえるという点でも大きな意義を有しています。コンピューターなどによらずに、限られた時間の中で濃密な調査を重ねた編集作業、特にその中心を担った小柳誠之こやなぎまことゆき氏の労は、相当なものだったと思えます。

ただ残念ながら、刊行から年月を経ているため、近年の情報については、その後の文献で補う必要があります。例えば北海道教育委員会による『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ』では、その中で取り上げた伝承者について関係資料を紹介しています。

\* \* \*

ここ数年の、インターネットにおける各種のデータベースの提供や図書の復刻出版等による情報量の増加には目覚ましいものがあります。この傾向は今後いっそう進むと思いますが、情報の流通量が増加すればするほど、典拠のしっかりしたデータが大切になります。そのような意味でも、『文献上のエカシとフチ』のような仕事が大事だと思えます。

小柳氏によるこの本の序文は、掲載できなかった人がなお多数いることを記し、「たいへん心残りのことである」「さらに関係機関や関係者によって集大成することが望まれる」と述べています。今後託された宿題を果していくことに、当センターとしても努めていきたいと思えます。

(研究職員 小川正人)

## 【フィールドからデスクから】

### カムイの声を聴くということ

これまで筆者は、胆振や日高地方の古老からアイヌ語に関する聴き取りを続けています。平取町で採録したウウェペケレ（散文説話）と呼ばれる物語の中に、こんな場面（①～③）が冒頭に出てきました。

①「私は老いた両親と暮らしていました。家の中で父と私が横になっていると、急に女の叫び声が聞こえました。父には聞こえずに私だけが聞こえたのですが、父は「神様がお前に聞かせたのだらうから、その声のした方へ助けに行きなさい」と言うので、私は助けに行きました…。(後略)」(1995(平成7)年6月9日採録)

②「イシカリの河口に住む友人に会いたくなかった私は旅に出ました。途中、川岸で休んでいると、川の中にあるドジョウとキリキリチェッポ kirkir ceppo（魚であるが和名不明）が会話している声を聞きました。その会話の内容から、河口に住む友人が、飼っている猫に今晚殺されるかもしれないことを知り、私は助けに行きました…。(後略)」(1996(平成8)年5月31日採録)

③「イシカリの河口に住む長者の息子が病気だという噂を、中流に住んでいる私は聞いていました。ある日、村から少し離れた原っぱへ行って座っていると、ヤナギとナラの木の枝がゆらゆら揺れ動いた音が、「河口に住む長者の息子が嫁をもらったけれど、その嫁に呪い殺されそうだ。この娘が助けに行かなければ、長者の息子は二、三日で死ぬだろう」という声に聞こえました。そこで私は急いで助けに行きました…。(後略)」(1996(平成8)年9月25日採録)

これらに共通するのは、「女の叫び声」や「ドジョウとキリキリチェッポの声」や木の揺れる音から、人間がメッセージを受け取っていることです。また、偶然なのかしれませんが、主人公が休んでいる時に一人だけがそれを聴くことができている点です。語り手によれば、これはカムイ（神）の声であり、このようなかたちでカムイの声を聴くことを語り手はアイヌ語で「オハイヌ」と呼んでいます。

\* \* \*

アイヌ文化の伝統的な考え方では、アイヌが人間の世界で幸福に暮らすためにはカムイの庇護が必要であるとされています。いっぽうのカムイもアイヌから祀られることで神格を保ち神の世界で暮らしていけるといわれています。そのため、カムイとアイヌはお互いの存在を成り立たせるため、必要に応じていろいろな方法で連絡を取り合っており、上記①～③のようなメッセージは、カムイからアイヌに対する連絡の一つのかたちだといえます。

カムイとアイヌの関わりというのは、アイヌ文化研究においては様々な分野に関わる大きなテーマで、それについての研究成果も多く残されています。特にアイヌからカムイへの連絡手段であるカムイノミや、カムイが人にのり移ったり夢などに現れたりして、その意志を告げるといわれる「託宣」という現象については、いろいろな報告や論文があります。ただ、それらの中で上記のオハイヌということばで表現された例については、知里真志保『知里真志保著作集 別巻Ⅱ』(平凡社、1975年)や萱野茂<sup>かやのしげる</sup>『萱野茂のアイヌ語辞典』(三省堂、1996年)にいくつか記されているだけで、今のところ他の辞典類には見当たりません。知里や萱野の挙げた例は、実際に存在した人の体験談として、「山中や屋内で魔物に声をかけられて返事をすると早死にしてしまう」というような不気味な言伝えや「神同士が山中で名前を呼び交わしていたのを聞いた」というようなものです。筆者が採録した散文説話の例とは、声の主からの連絡の受け取り方やその結果が異なっているようなので、このことばや現象については、まだまだ調べる余地があるとともに新たな事例を見出す可能性が大きいと考えられます。

\* \* \*

オハイヌについては、口頭文芸の中だけでなく、知里真志保や萱野茂の書いた例のように、地域で実際にあったこととして言伝えられているものも多いようです。例えば、話者としては比較的若い世代のKさんは、「ある狩人が誰もい

ない山中で突然、「ニペキ、ニペキ」と呼びかけられた。そのことを聞いた村人は、その人をニペキと呼ぶようになった」という話を聞かせてくれました。Kさん自身はこのような現象をアイヌ語で何というのか知りませんでした。他の古老たちはこのようなこともオハイヌと呼ぶと教えてくれました。口頭文芸を流暢に語れる人や伝統的な儀式をよく知っている人たち以外でも、こういった言伝えや体験をしている人は少なくないと思われ、道内各地の人たちから、聴き取り調査を進めたいと考えています。また、これまでに記録された様々な録音資料や採録ノートの中にも、こうした事象に関わる記述があると思われ、関係機関が所蔵する文書資料等の文献調査も併せて行う必要があると思います。

神から人間への連絡は、アイヌ文化以外にもいろいろと研究されていることがあって、「託宣」とか「神託」とか、ある程度決まった訳語で表現されていることが多いようです。オハイヌということばもただ単に「幻聴」と日本語に訳されることが多いのですが、こうしたことばだけで理解しようとする、どうしても日本語の意味するものに引かれてしまい、アイヌ文化を背景としたことばの本当の意味を知ることは難しくなります。

カムイとアイヌの連絡の一つであるオハイヌの例は、決して十分な量のデータが集まっているとはいえません。アイヌ語の語形とかその対訳のみでなく、カムイとアイヌの連絡がどのような状況で、なんのために行われていたのかなど様々な事例を収集してから分析することが大事であると思われ。新年度からは、オハイヌということばを手がかりに、カムイとアイヌの相互のコミュニケーションというべきものについて、いろいろと調べを進めたいと考えています。

(研究職員 大谷洋一)

## 平成16年度から公開する資料について

平成15年度から、久保寺逸彦文庫の写真資料やセンターが採録した音声資料の一部が、当センターの閲覧コーナーで閲覧・視聴できるようになっています。写真資料は紙焼き（プリントアウト）で、採録した音声資料はCD（コンパクトディスク）で利用できます。

平成16年度からは、引き続きセンター採録の音声資料が22点、新たに山田秀三文庫と久保寺逸彦文庫の音声資料のうち、沙流地方の地名調査に関するものなど12点が加わる予定です。

これらは、閲覧コーナーに設置したコンピューターで検索したり閲覧・視聴することができます。なお、コンピューターは1台だけなので、なるべく事前に連絡のうえ来所して下さいをお願いします。

## 企画展のお知らせ

「アイヌ語地名を歩く—山田秀三の地名研究から—」

10月30日（土）～11月28日（日）

北海道立文学館（札幌市中央区 中島公園内）

入場無料

北海道の地名の多くは、アイヌ語に由来しています。アイヌ語地名研究で知られる山田秀三氏が遺した各地の調査記録、地図や写真などを通じて、アイヌ語地名の世界を紹介します。期間中には講演会の開催も予定しています。

詳細は、次号及び当センターのホームページ等でお知らせします。

## 行事

### アイヌ文化講座を開催しました

センターの普及事業の一環として、毎年各地で「アイヌ文化講座」を開催しています。今年度は森町教育委員会と共催し、去る10月24日（金）に森町公民館で開催しました。

今回の講座は、「百年前の森のアイヌ文化～ピリカ会とF.スターの資料をとおして～」のテーマのもと、森町の医師であった村岡格<sup>むらおかかく</sup>が1909（明治42）年にアイヌ文化研究を目的に設立した「ピリカ会」の資料と、同じ頃に森町ほか北海道各地を調査したアメリカの人類学者F. スターの記録を紹介しました。

講師には、海外のアイヌ文化関係資料の調査を長年行っている小谷凱宣<sup>こたによしのぶ</sup>氏（南山大学人文学部教授）を迎え、F. スターの資料を中心に講演していただきました。また併せて、森町が所蔵する「村岡文庫」やその他の「ピリカ会」関係資料について、当センター職員による調査報告を行いました。

講座には約70名の参加がありました。前日までの陽気が一変してかなり肌寒い日でしたが、森町ばかりか近隣の市町村からも参加していただいたことに感謝します。



上記のアイヌ文化講座の概要は、センターのホームページで紹介しています。

### センター刊行物のお知らせ

今年度3月末に次の3点の刊行物を発行しました。このうち『研究紀要』は、主に道内外の大学、博物館、研究機関、図書館、アイヌ文化

関係機関などに配布するほか、北海道行政情報センター（北海道庁別館3F／電話011-231-4111内線22-389、または011-241-7979）で有償頒布します。

・『アイヌ民族文化研究センターだより』20号  
・『アイヌ文化紹介小冊子 ポン カンピソ シ9 地名』

・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10号（以下は表題と執筆者名です）

【論文】知里幸恵『アイヌ神謡集』の難読箇所と特異な言語事例をめぐって 佐藤知己

【論文】アイヌ口承文芸にあらわれる衣服について 本田優子

【研究ノート】1960年代、古老の音の記憶—フィールドノートの落穂ひろい（Ⅱ） 谷本一之

【調査報告】松島トミさんの口承文芸 6 大谷洋一

【調査報告】旭川地方におけるタプカッについて—杉村満さんの伝承より— 甲地利恵

【資料紹介】V.N.ヴァシーリエフ「エゾおよびサハリン島アイヌ紀行」 荻原真子（訳）

【資料紹介】島根県美保関町の北方民族関係資料 平野芳英・山崎幸治・北原次郎太

### 平成15年度後半の主な動き

10月

・アイヌ文化講座（森町／森町教育委員会と共催）

11月

・全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会及び研修会（仙台市／参加：小川）

3月

・平成15年度第2回運営協議会

（会議記録は当センターで閲覧できます）

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel.011-272-8801(代) Fax.011-272-8850

月～金／9:00～17:00（土・日・祝日／休）

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>



古紙配合率100%、白色度70%の再生紙を使用しています。